

# カザフ国立大学の言語学習者の学習リソースの利用 —韓国・日本学科の学習者を例に—

シヨリナ・ダリヤグル  
カザフ国立大学

キーワード：学習環境 学習リソース 自律学習

## 1. はじめに

カザフ国立大学東洋学部韓国・日本学科では、1992年から韓国語と日本語のコースが実施されている。学科の設立から20年以上を経て、教授法、学習者の学習目標、学習環境、学習手段は変化してきた。現地の教師のレベルも向上し、ほとんどの教師が教師研修に参加し、読解と文法中心の授業から、コミュニケーション能力と学習者の自律性を重視する授業へ変化している傾向が見られる。カザフスタン共和国は孤独な学習環境だと思われる傾向であったが、学習環境に関しても、ネイティブスピーカーと接触する機会が少なく、教科書不足の状況から離れている傾向である。なお、両言語の学習環境はまったく同様ではなく、韓国語教育と日本語教育の学習環境は多少の差がある。1930年代は朝鮮人が国外追放され、カザフスタンに移住させられた。その結果、カザフスタン在住の朝鮮人の現在の人数は103,931人で、その朝鮮人が設立した韓国文化センターと出版している新聞と伝統的な劇場等があり、日本語学習者に比べ、韓国語学習者が韓国語と韓国文化に接触する機会が多い。しかし、情報通信が発達した現在、その差異はさほどなく、両言語の学習者が様々な学習リソースを利用できる環境であると思われる。

学習者が教室外で自律的に言語を学習する機会が多様な時代になり、学習者の自律性を育成する必要性が増加している。

『日本語教育重要用語1000』（1998）によると、自律学習(autonomous learning)の定義は「学習者自身が自己の学習に主体的に関わり学習を孤立化せず、教授者や教育機関などといったリソースを利用して行う学習」である。また、青木(1998)は自律学習プロセスを「学習者が自分のために、自らの知識とスキルを構築しようとして、仲間や教師やその他のリソースと協力し、交渉しつつ行う学習を自分自身の手で管理することである」と説明している。

学習者が自己の置かれている環境の中、自分に必要なリソースを選択し、それを意識的に活用することが必要である。しかし、教室外で学習者がどのように学習しているか、どの学習リソースをどのような目的で活用しているか、教師が把握するのは難しい。そこで、カザフ国立大学の日本語と韓国語の学習者は教室外でどのような学習手段を利用しているかを明らかにしたい。

## 2. 先行研究

田中・斎藤(1993)はリソースを「学習に関連するインターアクションの対象となるもの」と定義し、リソースを人的リソース、物的リソース、社会的リソースという3つの種類に分類している。人的リソースとは人に関するリソースである。しかし、必ずしも目標言語のネイティブスピーカーという意味ではなく、学習者同士、教師、友達などが学習リソースになり得る。物的リソースは物としての学習リソースで、その例として新聞、パソコンなどがあげられる。田中・斎藤(1993)は社会的リソースを「目標言語が使われている社会で学習している学習者には、その社会あるいはその社会の下位のコミュニティ」と説明している。社会のネットワークは日本あるいは韓国国内の留学生にとって重要なリソース源であるが、海外での学習者の場合は現地で行われる日本祭り、文化センター等の場で、学習者が目標言語とその文化に接触できる社会のネットワークが考えられる。

また、日本語教育における、学習リソースの研究の中、トムソンの研究が注目されている。トムソン (1997) はリソースを4つに分類している。それは、上述した人的リソース、物的リソース、社会的リソースの分類に「情報サービス・リソース」という種を加えた。トムソン (1997) による「情報サービス・リソース」とは日本関連の情報源のことである。学習リソースは明確に区別するのは難しく、田中・斎藤 (1993) が指摘されているように、複合的なリソースの利用は一般的である。

本稿では、田中・斎藤 (1993) の「学習に関連するインターアクションの対象となるもの」という定義に従う。ただし、リソースは日本語と韓国語でのモノに限定しない。

### 3. 調査の概要

言語学習における教室外での学習も非常に重要で、教室外、学習者はどのようなリソースを使用しているか把握することは必要である。教室外、学習者の学習リソースについて知る手段としてアンケート調査を行った。アンケート調査は2014年9月8日から9月19日に渡って、カザフ国立大学の韓国・日本学科の学習者を対象に実施した。アンケート調査対象者は2年、3年、4年の56名の学習者で、その内30名が日本語学習者であり、26名が韓国語学習者であった。

調査の背景として、学習者の留学体験の有無、言語学習動機と目標、言語学習に対する困難について調べた。学習動機と目標に関する項目を自由記述形式にした。言語学習に対する困難について、筆者の教授経験で、今まで学習者から聞いた困難を中心に、「1. 授業の時間数が少ない」、「2. 宿題が多い」、「3. 先生の説明が足りない」と3つの選択肢を設定した。また、選択肢の中の項目がどれも当たらない場合は、自由記述の欄も作成した。次に学習者が授業外、どのようなリソースを利用しているか把握するために、以下の設問を設定した。

Q1. 授業時間以外に週に何時間ぐらい言語学習に使っていますか。

Q2. 授業時間以外にどのようなリソースを利用し、学習していますか。

授業以外の学習時間に関するQ1. の回答について「1. 2-4時間」、「2. 5-7時間」、「3. 7-9時間」「4. 9時間以上」という選択肢を設定した。リソース利用に関するQ2. の回答について「1. 辞書」、「2. 図書館」、「3. インターネット」、「4. ドラマ、映画等」、「5. 先生に聞く」、「6. 母語話者の友達、知り合い等」、「7. スマートフォンの言語学習のアプリケーション」という7つの選択肢を設定したが、自由記述の欄も作成した。さらに、複数の回答選択を可能とした。

### 4. アンケート調査の結果

#### 4.1 留学体験と学習目標

留学した体験のある学習者が22名で、その内15名が韓国語学習者である。学習目標に関して、56名の内の3名が自分の学習目標について回答しなかったが、53名の内、もっとも多かった回答として「学習している言語を使用し、仕事したい」などの就職に関する回答であった。次に、「この言語が好きです」、「自分の成長のため」などの趣味的な動機の回答が多かった。また、4名の朝鮮人の祖先がいる学習者が「自分の母語で話せるようになりたい」という回答もあった。「留学する」という回答が一番少ないことが分かった。学習者の言語学習目標を表1にまとめた。

表1：学習者の言語学習目標

	就職	趣味	留学
日本語学習者	15名	8名	5名
韓国語学習者	16名	6名	3名
合計	31名	14名	8名

## 4.2 言語学習に対する困難

言語学習に対する困難についての設問に、8名の学習者は困難がないと回答した。困難として一番多いのは「1. 授業の時間数が少ない」と「2. 宿題が多い」の回答であった。次に困難に感じることがないという回答と「3. 先生の説明が足りない」の回答であった。また、自由記述の欄に自分の困難を書いた数人の学習者がいた。言語学習に対する困難についての48名の回答を表2にまとめた。

表2：学習者の言語に対する困難

1.	授業の時間数が少ない	19名
2.	宿題が多い	13名
3.	先生の説明が足りない	1名
4.	その他	14名
	言語を使用できる機会が少ない	5名
	忙しくて、学習のために時間がない	4名
	モチベーションがない	2名
	授業の内容が適切ではないと思う	1名
	私は文法が弱い	1名
	教師の説明がよく分からない	1名

## 4.3 Q1. と Q2. への回答

Q1. の「授業時間以外に週に何時間ぐらい言語学習に使っていますか。」の回答として、2-4時間が24名、5-7時間が19名、7-9時間が6名、9時間以上が7名という回答が得られた。

Q2. の「授業時間以外にどのようなリソースを利用し、学習していますか。」の回答についてドラマと映画等という視聴のものがもっとも多い。また、何名かの学習者が具体的にどのようにドラマと映画を見ているか答えた。未習語彙のカードを作成し、学習するとか、辞書で調べるとドラマを見る際、自分の学習方法を紹介し、補足説明を書いた。ドラマ等は正しい発音を身に付けるための方法であると数名の学習者が回答した。

それぞれのリソースが関連しており、はっきりした分類できない場合もあるが、三つの種類の中で、物的なリソースがもっとも利用されていると明らかになった。その中でもっとも利用されるリソースがドラマ、映画等の主に視聴覚に関わるリソースと分かった。人的リソースとしてのヒトが言語教師と友達に限られているのに対して、予想通り「インターネット」がもっとも重要なリソースの源になっていることが明らかになった。また、39名の学習者の回答ではドラマと映画を見る際、およびインターネットで情報検索の際、辞書の必要性が高いということが明らかになった。そして、スマートフォンの言語アプリケーションも積極的に利用している学習者も多い。

人的リソースについて、23名の学習者が母語話者の友達をリソースとして取り上げ、その内16名が韓国語学習者で、7名が日本語学習者であった。カザフスタンと韓国の関係が強いため、韓国語の学習者の方はネイティブスピーカーと接触する機会が多いことが分かった。しかし、母語話者があまりいない学習環境では両言語の学習者にとって、言語教師が貴重な人的なリソースになっていると確認できた。教師がリソースの提供者であるとともに、教師自身もリソースであることが言える。

学習者の自由記述の欄に「歌」がリソースとして取り上げられ、「好きな歌をよく聞いて、言葉を覚える」、「歌の分からない言葉を調べて、覚える」という学習に繋がる行動が見られた。また、異文化理解に繋がる文化センターの行事に参加するとことと、母語でその国の文学作品を読むという回答もあった。学習者のリソース利用についての回答を表3にまとめた。

表3：学習リソース

1.	ドラマ、映画等	43名
2.	インターネット	41名
3.	先生に聞く	41名
4.	辞書	39名
5.	スマートフォン	36名
6.	母語話者の友達、知り合い等	23名
7.	図書館	10名
8.	その他	25名
	歌	12名
	文化センター	7名
	文学作品	4名
	クラスメイト	2名

## 5. 終わりに

本調査はカザフ国立大学の日本語と韓国語の学習者を対象に、どのような学習リソースを利用しているのかについてアンケート調査を行った。対象者の学習者はドラマと映画等、視聴覚教材をよく利用し、自分の興味と関連した語彙を調べる等という学習者の行為が言語学習に繋がっていると明らかになった。また、これらのリソースは言語学習だけではなく、目標言語の国の文化と社会等についての学習手段であると言える。学習リソースの利用方法はインプットの傾向が強い。しかし、学習リソースの利用はどのようなアウトプットを促すかという疑問が残されている。

今回のアンケート調査ではリソースの具体的な利用方法について、把握できなかったため、今後より具体的な利用方法について調査する必要があると思われる。また、学習者がリソース利用に関する意識化も重要な課題である。そして、学習者が教室外でも、自律的に学習を進め推進する際、学習の支援者としての教師はどのような役割を果たしていくかにも検討が必要だと思われる。

## 参考文献

- 田中望・斎藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際-学習支援システムの開発-』大修館書店
- トムソン木下尋（1997）「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』7, 17-29
- 国立国語研究所（2004a）「これからの学習支援を考える一学びを支えるモノ・ヒト・コト」平成16年度国立国語研究所公開研究発表会資料
- 島崎薫（2010）「日本語学習者の「日本語使用者」としてのインターネットを通じたリソース使用に関する調査」『言語科学論集』第14号, 129-142
- 国立国語研究所（2004）『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究-韓国アンケート集計結果報告書』
- 青木直子（2008）「学習者なおオートノミーを育てる教師の役割」『英語教育』Vol. 56, No. 12, 大修館, 10-11
- 青木直子（2011）「学習者オートノミー 日本語教育と外国語教育の未来のために」ひつじ書房